

淡路方言の音節融合の共時的・通時的分析*

中澤 光平

kohein@l.u-tokyo.ac.jp

キーワード：淡路方言 形態音韻論 融合 音変化 相対年代

要旨

本稿では、兵庫県の淡路島と沼島で伝統的に話されている淡路方言の音節融合についての共時的・通時的分析を行う。淡路方言は周囲の近畿・四国方言と同様、トッシュヨリ「年寄り」、ノンミョル「飲んでいる」のような促音化、撥音化が広く観察される。このように、2音節が1音節化することを音節融合と定義したうえで、表層形を導く音韻規則を分析し、元のモーラ数を保つ（モーラ保持）か、表層形が音素目録から外れない（構造保持）かという2つの基準による共時的な振舞いから、音節融合が大きく カッツォ「鯉」のようなモーラ保持・構造保持型、タチャ「立てば」のようなモーラ非保持・構造保持型、ウヂャ「腕が」のようなモーラ非保持・構造非保持型 の3つのタイプに分けられることを述べる。さらに、それぞれのタイプで適用される音変化の条件の違いから、通時的に「モーラ保持・構造保持型」>「モーラ非保持・構造非保持型」（～「モーラ非保持・構造保持型」）の順序で生じたと主張する。最後に、近隣方言に見られる同様の現象について考察し、変化の相対年代が淡路方言と必ずしも一致せず、一部の音節融合は並行変化と見られること、および無助詞形が音節融合を経て生じた可能性について述べる。

1. 本稿の目的

兵庫県に属する淡路島（属島の沼島を含む）で伝統的に話されている淡路方言では、トッシュヨリ「年寄り」、オモッシュヨイ「面白い」、ノンミョル「飲んでいる」、マッシュヤ「ました」のように、語中に促音、撥音を伴う語や形式が多く見られる。これらは2つの音節が融合して1音節になるという変化の結果と考えられる。このように、2音節 $\sigma_1\sigma_2$ が語中音消失（syncope）を生じて1音節 σ_3 になることを音節融合と呼ぶことにする。本稿では、淡路方言の音節融合が生じる条件などについての共時的および通時的分析を行う。最後に、淡路島の近隣の方言に見られる類似の現象との関係を考察する。

なお、沼島方言は淡路の他の方言と大きく異なる特徴が見られることから、沼島方言を含む総称としての淡路方言の他に、沼島方言を含めない場合を淡路島方言と言って区別する。

* 本稿を執筆するにあたって長期にわたり協力してくださった話者の皆様に厚くお礼申し上げる（ご芳名は中澤 2014: 214 を参照。新たに磯崎健治さん、市原清一さん、萩原重幸さん、福田安次さんにもお世話になった）。

本稿は中澤（2011, 2012, 2013）を大幅に改稿したものである。また、本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（代表：木部暢子）および新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究（研究課題番号 21H00354）の成果の一部である。

1.1. 淡路方言の概要

淡路方言はその地理的条件に対応して、近畿方言的な特徴と中国・四国方言的な特徴を併せ持つ。近畿方言的な特徴としては、京都市や大阪市と同様のアクセント体系（＝中央式。上野善道 1987: 16）やコピュラ接語「ヤ」（『方言文法全国地図』（以下 GAJ）第 36 図）、順接助詞「サカイ」（GAJ 第 37 図）の使用などがある。中国・四国方言的な特徴としては、不可能形式による禁止表現（GAJ 第 221 図、第 223 図）や疑問詞と条件形の「係り結び」（GAJ 第 260 図）などがある。

淡路方言の音韻体系は標準語（共通語）とほぼ同じだが、本稿では次の表記を用いる。



図 1. 淡路島の位置と平成の大合併前（1市10町）の市町境

- (1) a. ガ行, ダ行 (ダ・デ・ド) の子音素は音価によらずそれぞれ /g/, /d/ と表記する。
- b. チとツ, タ行拗音に破擦音音素 /tʃ/ を立てる（〔例〕 /ci/ ‘チ’, /tʃa/ ‘チャ’）。
- c. 母音や半母音の前の喉音音素 /h/ は認めず, 音節境界は必要に応じて ‘.’ で示す。
- d. 促音 /q/, 撥音 /N/ の他に長母音に引き音素 /R/ を認める（〔例〕 /aR/ ‘アー’）。

淡路方言の音韻, 形態に関する主な特徴としては次の点が挙げられる。

- (2) a. 淡路島南部を中心に, 語中のガ行, ダ行 (ダ・デ・ド) が前鼻音を伴う。また, 北部を含め, ガ行子音は鼻濁音 [ŋ] でも発音される（〔g〕~[ŋ] の自由変異も見られる）。
- b. ‘セ’, ‘ゼ’ が [ʃe], [ʃe] に近く発音される地域（由良, 福良, 沼島）がある。その他の地域でも, わずかながら口蓋化の音色を伴うことがある。
- c. 語頭に撥音が立ち（〔例〕 ンネ「姉」), 促音も稀に立つ（〔例〕 ッサル「座る」）。
- d. 洲本を中心に, 母音語幹動詞の r 語幹化が見られる（〔例〕 oki-> okir- 「起きる」）。
- e. w 語幹動詞にウ音便が見られる（〔例〕 コータ「買った」, ワロ（一）タ「笑った」）。話者によっては終止・連体形がウトー「歌う」, オモー「思う」となる。
- f. 形容詞にウ音便が見られる（〔例〕 アコ（一）テ「赤くて」, ホシュ（一）テ「欲しくて」）。
- g. 「行く」, 「食う」, 「取る」, 「持つ」はイッテ, クーテ, トッテ, モッテ以外にイテ, クテ, トテ, モテの短縮形を有する。

(2) に関して, 動詞と形容詞の活用について簡単に述べる。

母音語幹動詞は「起きる」, 「受ける」のように語幹が /oki-/ , /uke-/ と母音で終わる動詞で,

学校文法で言う上一段活用, 下一段活用の動詞に対応する。広義には「する」, 「来る」を含む。これに対し, 「書く」, 「出す」のように語幹が /kək-/ , /das-/ と子音で終わる動詞を子音語幹動詞と言い, 学校文法の五段活用の動詞に対応する。語幹末音によって i 語幹動詞, s 語幹動詞などとも呼ぶ。w 語幹動詞¹では, 接辞 -te, -ta などが後続するとき, 次の交替を生じる。

- (3) a. /-aw-/ → /-oR-/ , /-o-/ [例] kaw- → koR- 「買う」, kuraw- → kuro(R)- 「喰らう」
 b. /-ow-/ → /-oR-/ , /-o-/ [例] jow- → joR- 「酔う」, omow- → omo(R)- 「思う」
 c. /-uw-/ → /-uR-/ , /-u-/ [例] suw- → suR- 「吸う」, nuguw- → nugu(R)- 「拭う」
 d. /-iw-/ → /-juR-/ [例] iw- → juR- 「言う」

このような語幹の交替は一般に音便と呼ばれ, w 語幹動詞で生じる音便をウ音便と言う。淡路方言では, w の前の母音と語幹の長さで形式が異なり, 語幹が CVw- より長い場合, 一般に /R/ が脱落する。逆に CVw- では /kuw-/ 「食う」を除いて必ず /R/ を伴う。また, ウ音便では (3a, d) のように母音の交替が見られる²。

w 語幹動詞のように, 形容詞の連用形にもウ音便が見られる。

- (4) a. /-a-/ → /-o(R)/ , /-a(R)/ [例] na- → noR- 「ない」, kura- → kuro(R)- , kura(R)- 「暗い」
 b. /-o-/ → /-o(R)/ [例] ko- → koR- 「濃い」, omo- → omo(R)- 「重い」
 c. /-u-/ → /-u(R)/ [例] su- → suR- 「酸っぱい」, nuku- → nuku(R)- 「温い」
 d. /-i-/ → /-ju(R)/ , /-i(R)/ [例] hosi- → hosju(R)- , hosi(R)- 「欲しい」

ただし, 動詞のウ音便と異なり, (4a, d) のように母音が交替しないことがある³。

1.2. 本稿のデータの概要

本稿で用いるデータは, 筆者が 2010 年から現在までに淡路各地で行ったフィールド調査に基づく。とりわけ, 2010 年 9 月～2011 年 3 月と 2019 年 5 月～2020 年 3 月に行った調査のデータが本稿の分析の中核を為す (2019 年 5 月～2020 年 3 月の調査地点は岩屋, 洲本, 三原, 沼島)。聞き取りは主に戦前生まれの方を対象に実施し, 調査方法は調査票を用いた面接調査で,

¹ /w/ は /a/ が後続する場合のみ現れ, それ以外では脱落する (/a/ が後続する場合もしばしば脱落する)。

² 語幹が /-ew/ で終わる動詞は淡路方言には見られない。通時的には, /jo.u/ < */wew-/ 「酔う」の他, /kasjo.u/ 「助ける」も /kasei/ 「加勢」からの逆成であればかつては */kasew-/ と /-ew/ 終わりだったかもしれない。

³ 語幹が /-e/ で終わる形容詞はほとんどないが, 沼島に /sigei/ 「間隔が密である《茂い》」(他地域では /sigioi/) があり, /sigio(R)-/ と交替する。また, 沼島を含む淡路周辺部では /oqkei/ 「大きい」(他地域では /oqkjoi/) もあるが, 語幹の交替がない ([例] /oqkenaru/ 「大きくなる」)。/sigioi/ , /oqkjoi/ は /sige-/ , /oqke-/ のウ音便形が一般化したものと思われるため, かつては淡路の他の地域でも /e/ 語幹の形容詞だった可能性がある。形容詞のウ音便形は現在では徐々に使用されなくなっているが, かつては /nagakaqta/ > /nagokaqta/ のような類推を起こすほど普通の形式だった。「無い」は /norte/ , /nornaru/ のように交替形のみ見られる。「良い」は /jo-i/ 以外に /eR/ という基本形を有するが, 基本形以外に /e/ は現れず (*ekaqta, *ekerja) 語幹は /jo-/ である。「良い」は基本形 /eR/ 以外にも, 連用形が /jonaru/ 「良くなる」と短い形もあり不規則である。

標準語に対応する方言形を答えていただく形で行った。淡路方言のデータで出典を記していないものは全て筆者の調査によるものである。地域差が問題にならない場合は地点について特にことわらない。

2. 音節融合の種類

淡路方言における音節融合には文法的（規則的）なものと同語彙的なものの2種類がある。

2.1. 文法的な融合形

2.1.1. 接辞「ヨル」の融合

進行相を表す接辞 /-jor-/ 「ヨル」は、動詞が子音語幹の場合に前の音節と融合する。

非子音語幹動詞の /sijoru/ 「しヨル」, /kijoru/ 「来ヨル」, /ukejoru/ 「受けヨル」, /waraijoru/ 「笑いヨル」などから、進行相を表す接辞 /-jor-/ が認められる。この /-jor-/ は、子音語幹動詞に付くとき次のような交替を示す。

- (5) a. 「書きヨル」 |kak-i-jor-u| → /kaQkjoru/, 「消しヨル」 |kes-i-jor-u| → /keQsjoru/
- b. 「死にヨル」 |sin-i-jor-u| → /siNnjoru/, 「読みヨル」 |jom-i-jor-u| → /joNmjoru/
- c. 「脱ぎヨル」 |nug-i-jor-u| → /nuQgjoru/ ~ /nuNgjoru/
- d. 「飛びヨル」 |tob-i-jor-u| → /toQbjoru/ ~ /toNbjoru/
- e. 「買いヨル」 |kaw-i-jor-u| → /kaijoru/
- f. 「起きヨル」 |oki-jor-u| → /okijoru/

語幹末子音が無声子音の場合は /-Ci-jo-| → /-QCjo-| と促音が補われ、鼻音の場合は /-Ci-jo-| → /-NCjo-| と撥音が補われる。有声阻害音の場合は2つの形があり⁴, w 語幹や母音語幹では (5e, f) のように融合しない。

語幹末子音が /r/ (r 語幹動詞) の場合、(6) のように予想されない形が現れる。

- (6) a. 「鳴りヨル」 |nar-i-jor-u| → [narjoru] /naQrjoru/ ~ [nan^drjoru] /naN^rjoru/
- b. 「鳴りヨル」 |nar-i-jor-u| → [naijoru] /naijoru/
- c. 「鳴りヨル」 |nar-i-jor-u| → [nan^dʒoru] /naN^zjoru/

⁴ 淡路島方言の /g/ の前鼻音の有無には地域差・個人差があるが、促音が補われるか撥音が補われるかは前鼻音の有無とは一応無関係のようである。そのため、/g/ が [ŋ] の話者でも [nuŋgjoru] のように (/Ng/ と対立する) /Qg/ が観察される ([ŋg] /Ng/ とする話者もいる)。一方で、ガ行子音が [ŋ] になる話者は /Qg/ とはならないため、音韻的にも /n/, /m/ と同様に鼻音である可能性があるが、[g] の話者でも /Ng/ となることがあるから、/ŋ/ と解釈する決め手とはならない。なお、高山 (2012) は濁音の (非) 鼻音性と促音+濁音の音素配列との関連性が示されていて (高山 2012: 136-145), 前鼻音がありながら促音+濁音も見られる例外として鹿児島県穎娃町、徳島市、老岐・対馬の方言が挙げられているが (同: 145), 淡路島方言もこの例外に加えられるだろう。淡路方言が [ŋg], [dd] を許容することから、促音+濁音の音素配列と前鼻音の脱落との関係については検討が必要だと考える (/Qg/ が少ないのは有声阻害音の重子音の禁止という一般的な制約のためかもしれない)。

(5) のように促音と撥音が補われる /naQrjoru/, /naNrjoru/ 以外に (6b, c) の形式も見られる。(6b) では |rij| → [ij] /ij/ と /r/ が脱落する。(6c) では |rij| → [nʰʒ] /Nzj/ と、子音が /r/ から /z/ になっている。これは、[nʰtʃ] /Nrtj/ が閉鎖を強めて [ndj] /Ndj/ になり⁵、さらに[nʰʒ] /Nzj/ に転じたものと考えられる。この背景には、[nʰtʃ] /Nr/, [r] /Qr/ という音連続の回避があると考えられる。いずれにしても、元より 1 音節減じた形になっている。

なお、/jasu-i/ 「～やすい」、/jo-i/ 「～よい」、/jak-u/ ~ /jaik-u/ 「～回る」でも「ヨル」と同様の融合が生じる。

2.1.2. 接語「ジャ」の融合

近畿諸方言では動詞に助詞類が付く場合や一部の名詞において促音化が見られる(中井 1990: 558–561)。淡路方言では /si, su, ci, cu, zi, zu/ で終わる語に接語 /zja/ (~ /ja/) ⁶ ([例] カゼジャ「風だ」) が後続すると、語の末尾が促音化あるいは撥音化する([例] |usi=(z)ja| → /uQsja/ 「牛ジャ」、|zjoRzu=(z)ja| → /zjoRQzja/ ~ /zjoRNzja/ 「上手ジャ」) ⁷。この交替は次のようにまとめられる。

- (7) a. |si=(z)ja|, |su=(z)ja| → /-Qsja/ b. |ci=(z)ja|, |cu=(z)ja| → /-Qcja/
c. |zi=(z)ja|, |zu=(z)ja| → /-Qzja/ ~ /-Nzja/

/zja/ との融合では、促音化すると元の /i/ と /u/ の違いはなくなり中和する([例] 「雉ジャ」、 「傷ジャ」 → キツジャ)。/si, su, ci, cu, zi, zu/ の直前に促音がある場合は促音化しない⁸。撥音がある場合も促音化しにくい(「箆筒ジャ」 → タンツジャなど全く不可能ではない)が、長母音や二重母音が先行する場合は促音化するため、超重音節化は不可といった一般化はできない。

2.1.3. 文末詞「ゾ」の融合

コンピュータ「ジャ」と似た例として、文末詞「ゾ」([例] 書くゾ「書くよ」。「ゼ」もほぼ同じ)が動詞語尾の /su, cu, ru/ と融合する⁹。

⁵ 淡路方言 Ndasu < *Nras- < nuras- 「濡らす」や英語 thunder < 中英語 thonre < 古英語 þunor 「雷」などのように、/nr-/ という音連続は一般に避けられる傾向があると考えられる。

⁶ コピュラ「ジャ」と同音のとりたて助詞 /zja/ 「～も」(cf. ダレ (一) ジャ「誰も」、ドコ (一) ジャ「何処も」とヒトツ「一つ」からなるヒトツチャ「一つも」でも同様の変化が生じている。興津 (1990: 30) には「いつチャ(何時じゃ)」の例もある(アクセントを示す傍線は省略)。

⁷ なじみのない語では促音化しづらく、/u/ で終わる語では /i/ で終わる語よりも促音化しづらい(「雉だ」キツジャは可でも「傷だ」キツジャは不可など)。しかし「水だ」ミツジャなど日常的な語であれば促音化するのであくまで傾向にとどまる。なお、淡路北部の特に女性ではコンピュータは /ja/ が普通で、この形式では /suQkja/ ← |suki=ja| 「好きだ」のように /s/, /c/, /z/ 以外でも融合する。

⁸ /hiQsi/ 「必死」、/guQzu/ 「グズ」で特殊拍への交替が生じると *hiQqsja/, *guQqzja/ ~ /guQnzja/ のように淡路方言で許容されない /qQ/, /qN/ という配列が生じてしまう。これらを回避するために *hiQsja/, * /guQzja/ ~ /gunzja/ に調整されるということも基本的にない(一名から一例「冊子ジャ」/saQsja/ を記録しているのみで、これも [saʃʃja] /saQsija/ の可能性がある)。

⁹ 疑問詞に付くとりたて助詞 /zo/ 「ゾ」でも /iQco/ 「何時ゾ」(< *icu=zo/), /daQzo/ ~ /danzo/ 「誰ゾ」のように(8)と同様の変化が生じている。

- (8) a. | $-su=zo$ | → / $-Qso$ / [例] | $kesu=zo$ | → / $keQso$ / 「消すゾ」
 b. | $-cu=zo$ | → / $-Qco$ / [例] | $ucu=zo$ | → / $uQco$ / 「打つゾ」
 c. | $-ru=zo$ | → / $-Qzo$ / ~ / $-Nzo$ / [例] | $kuru=zo$ | → / $kuQzo$ / ~ / $kuNzo$ / 「来るゾ」

(7) との違いは /z/ ではなく /r/ で融合が生じる点にある。/z/ がないのは淡路方言に /zu/ で終わる動詞が欠けているためだが、/r/ については融合ではなく | ru | → / Q / ~ / N / という自律的交替かもしれない (cf. | $kuru=ke$ | → / $kuQke$ / 「来るケ」)。(8c) が (8a, b) と並行的に $*/-Qro/$ ~ / $-Nro/$ となっていないのも他の2つとは異なる交替である可能性を示唆するが、一方で (6) のように / $Qr/$ ~ / $Nr/$ が回避された結果 / $Qr/$ ~ / $Nz/$ → / $Qz/$ ~ / $Nz/$ となったとも考えられる¹⁰。

2.1.4. 助詞「ガ」・「ハ」の融合

淡路方言では、助詞の「ガ」・「ハ」がともに名詞その他（以下、名詞で代表）と融合し、両者の形態的な区別がなくなる¹¹。「ガ」・「ハ」と名詞の融合形にはいくつか特徴的な音声、音韻に関する現象が見られることが先行研究で指摘されている。以下、筆者の調査データと併せ、「ガ」・「ハ」と名詞の融合形を整理する。

- (9) a. | $-a-Ca$ |, | $-o-Ca$ |, | $-u-Ca$ | → / $-a$ / (ただし | $-o-Ca$ |, | $-u-Ca$ | → / $-wa$ /)
 b. | $-e-Ca$ |, | $-i-Ca$ | → / $-ja$ /
 c. | $\#(C)a-Ca$ | → / $(C)aR$ /
 d. | $\#(C)o-Ca$ | → / $(C)owa$ /, | $\#(C)u-Ca$ | → / $(C)uwa$ /
 e. | $\#(C)e-Ca$ | → / $(C)eja$ /, | $\#(C)i-Ca$ | → / $(C)ija$ /

「ガ」・「ハ」の融合形の基本形を (9) にまとめた。(5)–(8) と異なり、融合後の形式には促音、撥音が補われない。また、(5)–(8) は狭母音が先行する場合にのみ生じるのに対し、(9) は全ての母音に生じる点でも異なる。

(9d, e) のように、1音節語では融合が生じない ($\#(C)a$ のみ長母音化する)。(9a, b) のように融合形が同音になることがある ([例] | $kumo-Ca$ |, | $kuma-Ca$ | → / $kuma$ / 「雲が; 熊が」, | $take-Ca$ |, | $taki-Ca$ | → / $takja$ / 「竹が; 滝が」)。

ただし、「 $-テ$ 」[te] と「 $-デ$ 」[de] の融合形は [-tja], [-dja] になり、「 $-チ$ 」[çi] (と「 $-ジ$ 」[zi]) の [-tja] (, [-za]) とは異なる。

¹⁰ / $Qr/$ > / $Qz/$ ~ / $Nz/$ は / $odoQza/$ ~ / $odonza/$ < / $odoQra/$ < / $odore-ra/$ 「お前ら《オノレ》」などにも推定される。与那国方言の2人称単数代名詞 / $nda/$ でも、宮古方言の対応語 vva (cf. $vvan$ 「売らない」) などから $*ura$ > / rra / > / dda / > / nda (cf. 波照間方言 da , 伊江島方言 r^a). いずれも2人称単数代名詞) のようなプロセスが考えられ、/ rr / を回避するという通方的な傾向が認められる。

¹¹ 弘ヤ [Hirosha] 家「弘の家」(興津 1990: 39) など明らかに「ガ」に対応するものと、する時にヤ「する時には」(同左) のように明らかに「ハ」に対応するものがあり、通時的にも両形式に由来すると考えられ、厳密には同音の異なる2つの形式とみなす必要がある。基底形は両者をまとめて暫定的に | $-ca$ | とする。

- (10) a. 饅は (コヂャ), 口は (クチャ) (脇 1965: 40)
 b. 袖そでャ (dya), 法事ほーじャ (ja) (興津 1990: 6-7)

また, ‘-ツ’[tsu] (と ‘-ズ’[zu]) の融合形は [-tsa] (, [-za]) になり, ‘-ト’[to] と ‘-ド’[do] の [-ta], [-da] とは異なる。

- (11) a. 夏は (ナツァ), 人は (シタ) (脇 1965: 40), なつァ (夏が), 一壘手ファースタ (興津 1990: 6)
 b. [mada] 「窓が」, [konda] 「今度は」

(10, 11) より, [ʃi]/ci/, [tsu]/cu/, [tja]/tja/, [dja]/dja/, [ʃa]/cja/, [tsa]/ca/ と解釈する。

以上は先行研究でも基本的に違いはないが, 異なる記述が見られる点もある。

‘-シ’/si/ と ‘-セ’/se/, ‘-ジ’/zi/ と ‘-ゼ’/ze/ の融合形に違いがあるとするもの (興津 1990: 6-7) と, ともに /sja/[ʃa] (と /zja/[ʒa]) で区別がないとするもの (脇 1965: 40) がある。筆者の調査でも, 区別のある話者とない話者の両方を確認した。岩屋, 由良, 沼島など, 概ね周辺部で区別が認められ, さらに (/cja/[ʃa] と対立する) [tʃja] も確認した。

- (12) a. 石いしャ (sha), 大人おとせャ (sya) 【/ose/ 「大人」】, おこぜおこャ (zya) (興津 1990: 7)
 b. 獅子は (シジシャ), 店は (ミジシャ) (脇 1965: 40)
 c. [aʃa] 「足が」, [asja] 「汗が」, [aʒa] 「味が」, [azja] 「畦が」, [ʃirentsja] 「フィレンツェは」

‘-ン’/N/ の場合, 鼻音化した [(w̃)ã] および [jã] が後続する (cf. 脇 1965, 興津 1990)。

- (13) a. 運は u(n)a, 恩は o(n)a, 品は hi(n)ya, 面は me(n)ya (脇 1965: 41)
 b. 運うヅお, 音おヅお, 駿げんャ (ゲげんヅおャ), 原因げんいんャ (ゲげんヅおヅおャ) 【マ】 (興津 1990: 7)

ところが, /-aŋ/ で終わる場合, 興津 (1990) は [-aŋã], 脇 (1965) は /-aŋ/ と対立する。また, 禰宜田 (1986) には 1 例 /sjaŋaŋ/ 「写真が」という形が挙げられている。

- (14) 勘かんヅお (興津 1990: 7), 判は han (脇 1965: 41), 写真が シャシヤン (禰宜田 1986: 39)

筆者の調査では, /N/ の融合形は拍数及び地区, 世代で語形に差があった。

2 拍語の場合, 撥音が鼻音化した渡り音 [w̃], [j] になる¹²。また, 渡り音の前後の母音も鼻音化することがある。ただし, /-aŋ/ で終わる場合の融合形は脇 (1965) のように /-aŋ/ の方が自然なようだった ([-aŋã] を許容する話者もいた)。

¹² [u^{w̃}a] 「運は」のように渡り音の前に短い [N] や [ŋ] が聞こえることもある。

- (15) a. 「勘が (良い)」 [kaŋ] ~ [kaŋ̃a] b. 「品が (良い)」 [çija]
 c. 「運が (良い)」 [uŋ̃a] d. 「線が (細い)」 [seja]
 e. 「門が (大きい)」 [moŋ̃a]

3拍以上の撥音で終わる語の場合、旧三原郡の緑、三原、西淡、南淡（福良、沼島を含む）の話者には2拍語と同様の変化が見られた。それに対し、旧津名郡の岩屋、東浦、北淡、津名、一宮、由良、五色の話者では /N/ の前の母音が /a/ に変わる¹³。

- (16) a. 「鞆が」 [kabaŋ̃a] ~ [kabaŋ] b. 「花瓶が」 [kabija]
 c. 「気分が」 [kibuŋ̃a] d. 「破片が」 [haheja]
 e. 「布団が」 [ɸutoŋ̃a]
- (17) a. 「鞆が」 [kabaŋ] b. 「花瓶が」 [kabjan]
 c. 「気分が」 [kibaŋ] d. 「破片が」 [haçan]
 e. 「布団が」 [ɸutaŋ] f. 「結婚は」 [kekkɔan]

禰宜田 (1986) の /sjasjan/ 「写真が」は (17) に合致する。また、「結婚は」では [kekkɔan] のような音も聞かれ、[kekkan] 「血管」と同音にならないと主張する話者もいた。

撥音で終わる2拍語の場合、「勘が」 [kaŋ̃a], 「品が」 [çija], 「運が」 [uŋ̃a], 「線が」 [seja], 「門が」 [moŋ̃a] のような発音および他の実現形から、この鼻音化した渡り音を /N/ の実現と認め /ka.Na/, /hi.Na/, /u.Na/, /se.Na/, /mo.Na/ と解釈する。通常はコーダ位置に来る /N/ が例外的にオンセット位置に来ることになる。

3拍以上の場合、(16) は /kaba.Na/, /kabi.Na/, /kibu.Na/, /hahe.Na/, /huto.Na/ のように解釈し、(17) は /kabaŋ/, /kabjan/, /kibaŋ/, /hahjan/, /hutaŋ/, /keQkwan/ と解釈する。

3拍以上の /N/ で終わる語の場合、(17) では [kabjan] のように語末の /N/ を超えて融合が生じ、助詞の融合が音節単位で起こる。これは外来語にも適用され、「プリンが」 [purjan], 「メロンが」 [meran] となる。淡路方言ではこのように、音節の軽重に関わらず融合が生じる。

拗音と長母音の場合は次の通りである。

- (18) a. 馬車は basya, 助手は zyosya, 場所は basya (脇 1965: 42)
 b. バーは bā, 戦友は senyua, 北海道は hokkaidoa, 椎は siya, 関係は kankeya (同上)

拗音は |CjV-a| → |Cja| となり、長母音は (9c, d, e) の1拍語と同じ規則が適用される¹⁴。

/si/ と /se/, /zi/ と /ze/ で終わる語の融合形に対立がある場合、/si/, /zi/ の /sja/ [ja], /zja/ [za]

¹³ 洲本市の話者では「ガ」・「ハ」の融合形が見られなかった。

¹⁴ むしろ、1拍語が表層で長母音となるため（[例] コー「子」）、長母音と同じ形式になるとすべきだろう。

に対し /se/, /ze/ で終わる語の融合形 [sja], [zja] をどう音韻的に解釈すべきか。/sja/, /zja/ は [ʃa], [ʒa] である以上、新たな半母音音素 /ɸ/ を立てて /sɸa/, /zɸa/ と解釈するしかない。/ɸ/ を立てることで、沼島方言の次のような対立も説明できる。

(19) [aʃa] 「足が」、[aʃɸa] 「汗が」、[takja] 「滝が」、[takɸa] 「竹が」

沼島方言の場合、[aʃa]/asja/, [aʃɸa]/asɸa/, [takja]/takja/, [takɸa]/takɸa/ と、/Cɸa/ を広く認める必要があり、体系的に [tja], [dja] も /tɸa/, /dɸa/ と解釈される¹⁵。

なお、先行研究では、「ガ」と「ハ」で融合形に違いがあると述べているものがある。

高橋 (1982: 261–262) では、助詞の「ハ」の融合形と「ガ」の融合形には (20) のような違いがあるとしている。

- (20) a. /i/ /e/ + /'wa/ ⇒ /ja/ /ku'ja/ 杭は、/hunja/ 船は、/sorja/ それは
 b. /o/ /u/ + /'wa/ ⇒ /a/ /miza/ 水は、/i'wa/ 魚は、/konoka/ この子は、【以下略】
 c. /o/ + /ga/ ⇒ /o'a/ /sjo'a'waru'i/ 性がわるい
 d. /i/ + /ga/ ⇒ /i'ja/ /hi'janoboru/ 日が陽【マ】る
 e. /e/ + /ga/ ⇒ /e'ja/ /te'ja'itonara/ 手が痛くなるわ、/dare'jakita/ だれがきた

(20a, b) と (20c, d, e) の提示の仕方からわかるように、高橋 (1982) は「ハ」(文末詞の「ワ」を含む) では融合が起こるものの、「ガ」では (/g/ の脱落、同化は生じても) 音節の融合は起こらないと見ているようである。しかし、「ガ」の例として挙げられている (20c, d, e) のうち、(20c) の「性」は長母音、(20d) の「日」と (20e) の「手」は1拍語であり、音節融合が起こらない。唯一問題になるのが /dare'ja(kita)/ だれが(きた)」だが、/dareja/ は興津 (1990: 29) でも述べられているように「誰やら、誰か」という不定の形式で、「誰が」は筆者の調査では /darja/ だった。語用論的には両形式の機能が近くなるため¹⁶誤解したものかもしれない。

禰宜田 (1986: 39–40) も「拗音化が【中略】がよりもはの方によくあらわれているようである」と、「ガ」と「ハ」で融合形が異なるという内省を報告しているが、そこに挙げられている

¹⁵ 沼島方言には /ɸ/ を認めた方が体系的と考えるものの、他方言では [ʃa], [ʒa] と [sja], [zja] の対立のためだけに必要な音素で分布がかなり限られる。沼島方言以外でも、[tja] が /tɸa/ と解釈される可能性や、対立がなくても [kja] を /kja/, /kɸa/ の中和した音声と解釈する可能性さえ出てくる。これらについては、無標な音素で解釈できる場合はそちらを優先する、// と [] は1対1で対応し、音声レベルで完全に中和するような音韻解釈は採用しない、とすれば問題はある程度解消されるが、確定できない部分が出ることに変わりはない。通時的に見れば、沼島方言の状態が最も古く、/ɸ/ > /j/ という変化が淡路各地で並行的に生じているものと考えられる。淡路方言に限らず、石垣四箇方言の [ɛ:] (宮城 2003) のように、融合形では音素目録にない音声が生じて現れる。/ɸ/ と対称的な (/w/ と対立する) /ɸ/ を沼島方言その他に認める必要があるかも検討が必要である。

¹⁶ すなわち、/dareja kita/ を疑問文として用いる場合、これは単に来た人があるかを探る形式だが、それに対して Yes/No で答えることは実際には少なく、「…さんが来た」と返す方が自然である。このような場合「誰か来た？」は訪問者を尋ねる「誰が来た？」の機能を兼ねることになる(そもそも、来た人があるか確信がない、あるいは確認していない状況で「誰が来た？」と尋ねることがなさそうである)。

例は「鳥が鳴く→カラサ鳴く」と「雀は益鳥だ→スズミヤ益鳥や」になっている。これは「ガ」と「ハ」の違いでなく名詞の語末母音の違い (/u/ と /e/) による。

先行研究に言及されるような「ガ」と「ハ」の融合形の違いは今のところ確認できないため、両者は同じ形式として扱ってよいものとする¹⁷。

2.1.5. 文末詞「ワ」の融合

文末詞「ワ」¹⁸ ([例] エーワ「良いワ、良いよ」) でも「ガ」・「ハ」と類似の融合が起こる。高橋 (1982: 261) では (21) の例を挙げている。

(21) /si'jora/ しているわ、/sura/ するわ、/itonara/ 痛くなるわ

(21) は語尾が |ru| の例のみだが、興津 (1990: 46) は (22) の例を挙げる。

- (22) a. 先、行とって、後から行か。(行くわ)
b. ほない思わ。(そう思うわ)
c. そのうちに死な。(死ぬわ)
d. 死んでしまわ。(死んでしまうわ)
e. あんなボールやったら、この子でも打た。(打つわ)
f. 四つにもなったら、一人で遊ば。(遊ぶわ)
g. このカようお泳が。(この子はよく泳ぐわ)

(21, 22) は 2.1.4. の融合とほぼ同じだが、(22e) のみ (11) と異なり |cu-wa| → /-ca/ ではなく /-ta/ になっている。文末詞「ワ」と「ガ」・「ハ」の融合は 'ツ'/cu/ の融合形だけでなく、'ン'/N/ の融合形も異なっている。高橋 (1982: 261) は「ハ」と「ワ」の融合をまとめて扱い、/N/ の融合として (23) を挙げている。

(23) N + /'wa/ ⇒ /na/ /noborerena/ 登れないわ、/si'jahena/ しはしないわ、/narana/ ならないわ、
/'jorsena/ することはできないわ

いずれも文末詞「ワ」の例であり、|N-wa| → /-na/ となっていて「ガ」・「ハ」の (13-17) とは異なる。興津 (1990: 46) にも次の例がある。

¹⁷ ただし、文節末の母音長が、「ハ」に由来する融合形の方が「ガ」に由来する融合形よりも若干長い可能性がある。この点、詳細な調査が必要だが、/Car/ と /Ca/ のような明瞭な長さの対立があるわけではないため、仮に音声差があっても、分節音レベルではなくプロミネンスなど統語レベルでの違いと思われる。

¹⁸ 文末詞「ワ」は他にも /sitawa/ 「したワ」、/orowa/ 「居ろうワ」など過去形、意志・推量形に接続する。沼島では過去形に接続する場合 /sitor/ 「したワ」と /-or/ に転じる (/or/ については 5 節も参照)。

- (24) a. 出来^けへな。 行^けへな。 あ^けへな。 知^れへな。 来とれへな。
 b. あ^かな (*あ^かんわ)。 僕^ぼカ^カ知^らな。 まだ^ま来^まな。 (*ま^まだ^だ来^来んわ)

両者が異なる形式になる理由は、基底形の違いとして分析できる可能性がある。[matsu]「松」は基底形が |macu| と破擦音のため、|macu-Ca|→/maca/ [matsa]「松は」となるが、[matsu]「待つ」は基底形が |mat-u| と破裂音のため (cf. /mat-a-N/「待たない」、/mat-e/「待て」)、|mat-u-wa|→/mata/ [mata]「待つワ」となると解釈する。同様に、否定接辞 /-N/, /-heN/ は /-(he)naNda/「～なかった」、/-(he)na/~/-(he)nja/「～しなければ」(ただし /-hena/~/-henja/ は稀) と活用するため、基底形は |-(he)n| であり、調音点が指定されていない撥音 /N/ とは異なる形式になると分析できる。

ところで、/-(he)n(j)a/ では否定接辞に条件接辞 /-(r)ja/ が付いている (/-(he)n-ja/) が、文末詞「ワ」と同様 /n/ が現れる一方、/mac-ja/「待てば」のように /-(r)ja/ は語幹の /t/ を破擦化する。条件接辞 /-(r)ja/ は通時的に */-(r)e-ba/ に遡るから、「バ」でも2音節から1音節化する音節融合が生じている。文末詞「ワ」と「バ」の共通点と相違点はどのように説明できるだろうか。

2.1.6. 文法的な音節融合の音韻規則

「ヨル」、「ジャ」、「ゾ」の融合では促音か撥音が補われモーラを保持するのに対し、「ガ」・「ハ」、「ワ」、「バ」はモーラが保持されない。さらに、「ガ」・「ハ」の融合では [tja], [dja], [sja], [wa] など音素目録から外れる音節が現れる。このような融合形の違いは、共時的には融合の生じるレベルの違いとして表せる。

助詞「ガ」・「ハ」の融合の過程は次のように分析される。

表 1. 助詞「ガ」・「ハ」の融合プロセス (1)

	滝が	竹が	串が	癖が	土が	縦が	夏が	人が	毛布が
基底形	taki-a	take-a	kusi-a	kuse-a	cuci-a	tate-a	nacu-a	hito-a	moRhu-a
子音同化	—	—	kuʃi-a	—	tsuʃi-a	—	natsu-a	çito-a	moRɸu-a
融合	takja	takɕa	kuʃja	kuseɕa	tsuʃja	tateɕa	natsɕa	çitɕa	moRɸɕa
半母音化	takja	takja	kuʃja	kusja	tsuʃja	tatja	natswa	çitwa	moRɸwa
w-j 削除	—	—	kuʃa	—	tsuʃa	—	natsa	çita	moRɸa
表層形	[takja]	[takja]	[kuʃa]	[kusja]	[tsuʃa]	[tatja]	[natsa]	[çita]	[mo:ɸa]

融合に関する音韻規則について次のように定義する。

- (25) a. 「子音同化」: C が後続音に同化する。
 /si/ → ʃi, /sj/ → ʃ, /zi/ → ʒi, /zj/ → ʒ, /ci/ → tʃi, /cj/ → tʃ, /ti/ → tʃi, /tj/ → tʃ, /tu/ → tsu,
 /ni/ → ni, /nj/ → n, /hi/ → çi, /hj/ → ç, /hu/ → ɸu
 b. 「融合」: 形態素 (音節) が融合する。先行語の語末母音はモーラを失う。

- c. 「半母音化」: モーラを失った母音が半母音化する。i, e → j¹⁹, u, o → w, a → Ø
 d. 「w:j 削除」: 淡路方言の表層形で認められない半母音を削除する。
 ʃj → ʃ, ʒj → ʒ, ɸj → ɸ, nj → n, ɕj → ɕ, (kwa-, gwa- 以外の) Cw → C

「ガ」・「ハ」の融合形は最終音節の母音が短母音の [a] となることから、形態素は短母音の |-a| であり、|-a| が融合した音節の母音はモーラを持たなくなり半母音化すると考える。

また、/si/ と /se/, /zi/ と /ze/ では融合形が異なるため、/si/ → [ʃi] という子音の同化が生じた後に |-a| が融合するという順序になる。

撥音 /N/ で終わる場合は表 2, 3 となる。

表 2. 助詞「ガ」・「ハ」の融合プロセス (2)

	勘が	門が	品が	鞆が	布団が	花瓶が	昨日が
基底形	[kaN-a]	[moN-a]	[hiN-a]	[kabaN-a]	[hutoN-a]	[kabiN-a]	[kinoR-a]
子音同化	—	—	ɕiN-a	—	ɸutoN-a	—	—
融合	kaŋa	moŋa	ɕiŋa	kabaŋa	ɸutoŋa	kabiŋa	kinora
半母音化	kaŋ̥a	moŋ̥a	ɕiŋ̥a	kabaŋ̥a	ɸutoŋ̥a	kabiŋ̥a	kinowa
w:j 削除	—	—	—	—	—	—	—
表層形	[kaŋ̥a]	[moŋ̥a]	[ɕiŋ̥a]	[kabaŋ̥a]	[ɸutoŋ̥a]	[kabiŋ̥a]	[kinowa]

表 3. 助詞「ガ」・「ハ」の融合プロセス (3)

	勘が	鞆が	布団が	花瓶が	昨日が
基底形	[kaN-a]	[kabaN-a]	[hutoN-a]	[kabiN-a]	[kinoR-a]
子音同化	—	—	ɸutoN-a	—	—
融合	kaŋa	kabaŋa	ɸutoŋa	kabiŋa	kinora
半母音化	kaN	kabaN	ɸutwaN	kabiŋa	kinwaR → kinwa
w:j 削除	—	—	ɸutaN	—	kina
表層形	[kaN]	[kabaN]	[ɸutaN]	[kabiŋa]	[kina]

オンセットの /N/, /R/ は (25c) によって /N/ → [j]~[w̃], /R/ → [j]~[w]~Ø となると考える。(25c) は (25b) の後で無条件に生じるため、これ以降 (25b) とまとめて 1 つの規則とする。

表 2 では |-a| が語の右端と融合するように見えるが、表 3 では |-a| が |N| の前に入り込む。これより、形態素 |-a| は語末でなく最終母音に非線形的に融合することがわかる。/VN/ と /VR/ における表 2, 3 の variant は、/N/, /R/ を /V/ とみなすか /C/ とみなすかの違いである。また、表 3 の /aR/ → /a/ は淡路方言には原則 /aR/ で終わる語がないことによる短母音化である。

¹⁹ (19) のように沼島方言では [e] のまま (表層形の音韻表記では /e/) となる。

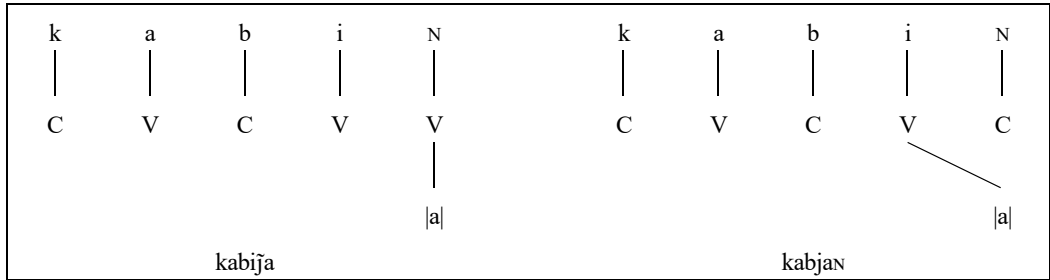


図 2. 助詞「ガ」・「ハ」の融合プロセス (4)

接続助詞「バ」も「ガ」・「ハ」と同様に融合するが, [keʃa]「消せば」, [taʃa]「立てば」のように /-se/, /-te/ で子音の同化が生じることから, 子音同化の適用前に融合が生じることになる。融合する形態素を共時的に |-a| としたうえで音韻規則を考えると表 4 のようになる。

表 4. 助詞「バ」の融合プロセス

	炊けバ	cf. 竹ハ	押せバ	cf. 大人ハ	立てバ	cf. 縦ハ
基底形	[take-a]	[take-a]	[ose-a]	[ose-a]	[tate-a]	[tate-a]
融合 2	<i>takja</i>	—	<i>osja</i>	—	<i>taʃja</i>	—
子音同化	—	—	oʃa	—	taʃa	—
融合	—	<i>takja</i>	—	<i>osja</i>	—	<i>taʃja</i>
w:j 削除	—	—	—	—	—	—
表層形	[takja]	[takja]	[oʃa]	[osja]	[taʃja]	[taʃja]

対照のため、「ガ」・「ハ」の融合例を併せて挙げた。新たに設定した融合 2 のレベルで「バ」が、融合のレベルで「ガ」・「ハ」が融合する。「バ」は基底に近いレベルで融合すると言える。これ以降、融合 2 と区別するため「ガ」・「ハ」の融合を融合 1 と呼び替える。

文末詞「ワ」も、子音の同化規則が生じる前という、「バ」と同じレベルで融合が生じると考えられる。文末詞「ワ」の形態素を |-wa| としたうえで、音韻規則は表 5 のようになる。

表 5. 文末詞「ワ」の融合プロセス

	待つワ	cf. 松ガ	センワ	cf. 線ガ	載センワ	cf. 風船ガ	cf. 待てバ
基底形	[matu-wa]	[macu-a]	[sen-wa]	[seN-a]	[nosen-wa]	[huRseN-a]	[mate-a]
融合 2	<i>matwa</i>	—	<i>senwa</i>	—	<i>nosenwa</i>	—	<i>matja</i>
子音同化	—	matsu-a	—	—	—	ɸuRseN-a	maʃja
融合 1	—	<i>matswa</i>	—	<i>seʃa</i>	—	<i>ɸuRseʃa</i>	—
w:j 削除	mata	matsa	sena	—	nosena	—	—
融合形	[mata]	[matsa]	[sena]	[seʃa]	[nosena]	[ɸu:seʃa]	[maʃja]

対照のため、「ガ」・「ハ」および「バ」の融合例を並べた。同じ融合2のレベルながら、「ワ」は /t/ が破擦化する環境（u）を奪い（奪取関係）、「バ」は破擦化する環境（j）を生じる（供給関係）ため、一見正反対の音韻現象が生じているように見える²⁰。

文末詞「ワ」の融合形に関して、興津（1990: 46）は「打た」と /-ta/ の形式のみ挙げるが、筆者の調査では「打つわ」[uta]~[utsa]、「待つわ」[mata]~[matsa] のように /-ta/ と /-ca/ の2つが可能で、/-ta/ は融合2、/-ca/ は「ガ」・「ハ」と同じ融合1の形式に対応する。2つの形式が可能なのは、通時的に文末詞「ワ」の融合のレベルが変わったためと考える。「ガ」・「ハ」の融合形では「夏」が[natsa]/naca/ のように促音を伴わない /ca/ が出てくるが、/ce・ca・co/ は、促音のあとにのみあらわれる」（高橋 1982: 259）とあるように、促音を伴わない /ca/ は淡路方言には原則として見られない²¹。/-ta/ は構造保持（Structure Preservation）のためにこのような lexicon にない音素配列を嫌ったものと考えられる。そうだとすれば、「る」以外の音で終わる動詞（五段活用動詞の大部分）に「わ」がつく時は、“終止形+a”の形が未然形と同じになる為、ちょっと聞くと、活用しているのかと思いがすが、活用ではない」（興津 1990: 46）という興津の主張とは異なり、未然形 /ut-a-/ への類推が働いて活用の一形式になったと考える²²。これに対し、/-(he)N/ と「ワ」との融合形は、通時的には否定接辞が *-(he)nu と母音を伴っていた時代に *-(he)nu=wa>-(he)na と変化したものだろう。この形式は成立が早くすでに /-(he)N/ の「活用」として取りこまれていると思われ、「ガ」・「ハ」の融合形は戦前生まれの話者でも次第に用いられなくなる傾向があるのに対し、「ワ」の融合形は戦後生まれの世代にも見られる。

このように、「バ」・「ワ」は同化規則の適用前に融合するのに対し、「ガ」・「ハ」では同化規則の適用後に融合することになり、「バ」・「ワ」は lexical な融合、「ガ」・「ハ」は postlexical な融合であると言える。次の違いが根拠となる。

- (26) a. 「バ」・「ワ」は限られた形態素とのみ融合するが、「ガ」・「ハ」は多くの形態素と融合し、より表層的な現象と位置づけられる。
- b. 「バ」・「ワ」の融合では構造保持（Structure Preservation）が守られるのに対し、「ガ」・「ハ」の融合では [sja], [w̃a] など音素目録から外れる音節や, [ɸa], [tja] など融合形以外では現れない音節が現れる。

²⁰ なお、/-(he)N/ の基底形に [(he)n] を立てる場合、|n|→N/_# の音韻規則が必要になる。あるいは撥音の基底形を |n| とし、子音同化と同じ層で |n|→N/ の規則を仮定することになる。ただし、「セン」の基底形を [se-n] とすると /-na/ となることが説明できず、[se-n] だとしても |n| が /C/ 扱いをされ *sɛ̃n/ [sjan] (→ *sɛ̃n [sjan]) になるのではないかという問題がある。「ガ」・「ハ」は非線形に融合するのに対し、「ワ」は線形に融合するものとみるか、「セン」は基底形では抽象的な母音 /v/ がある /senv/ と解釈する。後者の場合、助詞が融合しない場合 /v/→∅ となったうえで /n/→N か、/nv/→N となると考える。

²¹ /ceru/「崩れる」、/cer̃te-/「連れて」、/coi/「強い」など語頭の /ce, co/ はいくつか確認できる。/coi/ は「つおい(t'soi)」（田中 1934: 155）、「つヅオイ」（脇 1965: 15）から元来は語頭に促音があったことが分かる。筆者も由良で [tʃe:]「強い」を記録している。このことから、/ceru/ など元は */q̃e-/ だったと考えられる。

²² 八丈方言の nomowa と nomo「飲む」（金田 2001）や与那国方言の kagu と kagu「書く」（与那国方言辞典編集委員会 2021）のように、文を終止する形では文末詞などモーダルな形式が取り込まれて文法化しやすいと思われる（GAJ 第 61 図～第 71 図も参照）。淡路方言の文末詞「ワ」の融合もそのような動機によると思われる。

これらの点から、「バ」・「ワ」の $[-(w)a]$ は *lexical component* に属するのに対し、「ガ」・「ハ」の $[-a]$ は *postlexical component* に属すると考えられる。そのため、「ガ」・「ハ」の $[-a]$ では *structure-changing* という性質を持つ融合2によって $[sja]$, $[zja]$, $[w̄a]$, $[ja]$ などの音が生じる。

「ヨル」, 「ジャ」, 「ゾ」の融合は共時的にどのように位置づけられるだろうか。「ガ」・「ハ」, 「バ」・「ワ」と異なり, 促音または撥音挿入による重子音化が見られるから, 融合1とも融合2とも異なる融合3とみなしなければならない。また, 「ガ」・「ハ」のように構造保持の例外となる音節を生じないから, 子音同化規則の前に融合3があることになる。文末詞「ワ」のように, 融合1と融合2が近い位置にあることを考慮すると, 融合3は融合2よりも前に位置づけられる。

表6. 「ヨル」の融合プロセス

	書きヨル	消しヨル	去にヨル	飛びヨル	買いヨル
基底形	$[k\text{ak-i-jor-u}]$	$[k\text{es-i-jor-u}]$	$[i\text{n-i-jor-u}]$	$[t\text{ob-i-jor-u}]$	$[k\text{aw-i-jor-u}]$
融合3	$k\text{ak.jjoru}$	$k\text{es.jjoru}$	$i\text{n.jjoru}$	$t\text{ob.jjoru}$	$k\text{aw.jjoru} (?)$
調整規則	$k\text{ak.kjjoru}$ ($k\text{aQkjjoru}$)	$k\text{es.sjjoru}$ ($k\text{eQsjjoru}$)	$i\text{n.njjoru}$ ($i\text{nNjjoru}$)	$t\text{ob.bjjoru}$ (→ $t\text{om.bjjoru}$) ($t\text{oQbjjoru} \sim t\text{onbjjoru}$)	$k\text{aw.wjjoru} (?)$ ($k\text{aQwjjoru}$)
w:j 同化	$k\text{aQkjjoru}$	$k\text{eQsjjoru}$	$i\text{nNjjoru}$	$t\text{oQbjjoru} \sim t\text{onbjjoru}$	$k\text{aQjjoru} (?)$
子音同化	—	$k\text{eQjforu}$	$i\text{nNjoru}$	—	—
w:j 削除	—	—	—	—	$k\text{aijjoru}$
表層形	$[k\text{akkjjoru}]$	$[k\text{e}f\text{jjoru}]$	$[i\text{njnjjoru}]$	$[t\text{obbjjoru}] \sim [t\text{ombjjoru}]$	$[k\text{aijjoru}]$

融合3では(狭)母音がモーラを担わなくなり半母音化するとともに後ろの音節への再音節化が生じると考える。再音節化では, 融合で生じたオンセットを調整する規則が適用される。

(27) 「調整規則」: オンセットを調整する。 $C.\{j, w\} \rightarrow C.C\{j, w\}$ ($Q\{j, w\}$ or $NC\{j, w\}$)

さらに, 融合によって余剰に生成される半母音を1つにまとめる規則 (28) を考える。

(28) 「w:j 同化」: 余剰な半母音を削除する。 $jj \rightarrow j$, $jw/wj \rightarrow j$, $ww \rightarrow w$ (繰り返し適用)

「ジャ」, 「ゾ」の融合も「ヨル」と同じく促音あるいは撥音が補われるから, 渡り音化による融合3のレベルと考える。これに伴い, 調整規則に次の規則を追加する必要がある。

(29) 「調整規則」(追加): オンセットを調整する。 $.jC \rightarrow .C$, $.wC \rightarrow .C$

表7で調整規則の位置に → で示した音韻規則は子音同化のレベルで生じると考えても良いが, オンセットに関わる規則のため (27, 29) のレベルに含めた。

表 7. 「ジャ」・「ゾ」の融合プロセス

	牛ジャ	臼ジャ	上手ジャ	消すゾ	打つゾ
基底形	usi=zja	usu=zja	zjoRzu=zja	kes-u=zō	ut-u=zō
融合 3	<i>us.jzja</i>	<i>us.wzja</i>	<i>zjoRz.wzja</i>	<i>kes.wzo</i>	<i>ut.wzo</i>
調整規則	us.zja → us.sja (uQsja)	us.zja → us.sja (uQsja)	zjoRz.zja (→ zjoRn.zja) (zjoRQzja ~ zjoRNzja)	kes.zō → kes.so (keQso)	ut.zō → ut.co (uQco)
w-j 同化	—	—	—	—	—
子音同化	uQfa	uQfa	ʒoRQʒa ~ ʒoRNʒa	—	—
w-j 削除	—	—	—	—	—
表層形	[uʃa]	[uʃa]	[ʒo: ⁴ ʒʒa ~ ʒo:n ⁴ ʒa]	[kesso]	[uttso]

調整規則での子音同化は若干複雑だが、/s/ > /c/ > /z/ > /r/ という階層が想定される（左側の音素に同化）。閉鎖の強さに対応するとすれば、淡路方言の /z/ は破擦音に分類される。

2.2. 語彙的な融合形

文法的な融合が規則的（生産的）に起こるのに対し、語彙的な融合は「鯉」|kacu.o| → /kaQco/ [katto] など一部の語にのみ生じる。本来は文法的な融合と同様に規則的だったが、方言形が使われなくなり現在は語彙的（非生産的）なものになりつつあると考えられる。一方で、語彙的な融合は様々な音環境で生じるため、文法的な融合だけでは不明な融合の条件が補完できる。

淡路全域で観察される語彙的な音節融合の具体例を表 8、表 9 に示す。

表 8、表 9 では、標準語に近い形を便宜的に淡路方言の原形（古形）とした。

表 8、表 9 から帰納すると、音節融合が起こる条件は (30)²³ のようにまとめられる。

(30) $\sigma_1 \cdot \sigma_2 (= /C_1S_1V_1 \cdot C_2S_2V_2/)$ (σ_1 は軽音節のみ、 σ_2 は重音節も可) の

- a. C_2 がゼロ、または C_1 と C_2 がともに coronal (/s/, /c/, /z/, /t/, /d/, /n/, /r/)
- b. V_1 が狭母音かつ V_2 が非狭母音²⁴

次の条件 (31) を満たす場合、融合した音節 σ_3 が拗音になる。

- (31) a. C_2 がゼロまたは /r/, かつ V_1 が前舌母音 (/i/) または S_1 か S_2 が /j/
- b. V_2 が非前舌母音 (/a/, /o/)

音節融合では原則としてモーラが保たれる。その実現には (32a, b, c) の 3 通りの形がある。

²³ (30), (31) は内容ごとに分けて書くが、全体が 1 つの条件であり、各内容は「かつ」で結ばれる。

²⁴ /ei/ > [e:] は二重母音の長母音化であり、音節数の変化を伴わないため本稿の対象外の変化である。ただし、動詞における [omo:]「思う」、[saso:]「誘う」などの [o:] は、/o.u/ と比べて音節数が減じているが、これらは /o.u/ > [o:] ではなく古い発音の残存と考えられる。

表 8. 融合した音節が（開）拗音になる例

「付き合い」	[tsukiai]	(*)/cuki#ai/	→	[tsukkjai]	/cuQkjai/
「打ち合う」	[utʃiau]	(*)/uci#au/	→	[utʃau]	/uQcʃau/
「空き家」	[akija]	(*)/aki#ja/	→	[akkja]	/aQkja/
「年寄り」	[toʃijori]	(*)/tosi#jori/	→	[toʃʃori]	/toQsjori/
「松脂」	[matsujani]	(*)/macu#jani/	→	[matʃjani]	/maQcjani/
「団扇」	[utʃiwa]	(*)/uci(#)wa/	→	[utʃa]	/uQcʃa/
「闇夜」	[jamijo]	(*)/jami#jo/	→	[jammjo]	/janmjo/
「面白い」	[omofiroi]	(*)/omosiroi/	→	[omofʃoi]	/omofʃoi/
「こちら」	[kofira]	(*)/kocira/	→	[kotʃa]	/koQcʃa/
「別条」	[betsuʒo:]	(*)/becuzjoR/	→	[betʃo(:)]	/beQcjo(R) ²⁵

表 9. 融合した音節が（開）拗音にならない例

「家」	[ie]	(*)/i.e/	→	[e:]	/eR/
「教える」	[oʃieru]	(*)/osi.eru/	→	[osseru]	/oQseru/
「鰹」	[katsuo]	(*)/kacu.o/	→	[kattso]	/kaQco/
「竹輪」	[ʃikuwa]	(*)/ciku(#)wa/	→	[ʃikka]	/ciQka/
「忘れる」	[wasureru]	(*)/wasureru/	→	[wasseru]	/waQseru/
「縛れる」	[motsureru]	(*)/mocureru/	→	[mottseru]	/moQceru/
「御馳走」	[gotʃiso:]	(*)/gocisor/	→	[gottso(:)]	/goQco(R)
「一膳」	[itʃizen]	(*)/ici(-)zeN/	→	[ittsen]	/iQceN/
「手伝い」	[tetsudai]	(*)/tecdai/	→	[tettai]	/teQtai/
「おじさん」	[ozisan]	(*)/ozi(-)saN/	→	[ossan]	/oQsaN/

(32) a. C₁が無声音かつ非語頭のとき、C₁の前に促音が補われる。

「空き家」	[akija] (*)/akija/	→	[akkja] /aQkja/
「教える」	[oʃieru] (*)/osi.eru/	→	[osseru] /oQseru/

b. C₁が鼻音かつ非語頭のとき、C₁の前に撥音が補われる。

「闇夜」	[jamijo] (*)/jami#jo/	→	[jammjo] /janmjo/
------	-----------------------	---	-------------------

c. C₁がゼロかつ語頭のとき、V₂の後に引き音が補われる²⁶。

「家」	[ie] (*)/i.e/	→	[e:] /eR/
-----	---------------	---	-----------

(32) の条件以外の場合、地域によって実現形が異なる。

²⁵ 通常は /beQcjonai/ 「別条ない」、/beQcjanai/ 「別条はない」の形で用いられる。

²⁶ この条件では /i.o/ 「魚」 (/ijo/, /ju.o/ とも)、/u.e/ 「上」 (/i.e/ とも)、/i.wa/ 「岩」 (/ju.wa/ とも) のように融合しない方が多く、/eR/ 「家」が例外かもしれない。ただし、*/joR/, */eR/, */jaR/ に一度変化した可能性もある。

- (33) a. C₁が有声阻害音 (/r/ 含む) かつ非語頭るとき, C₁の前に促音または撥音が補われる。
- 「麦わら」 [mūgiwara] (*) /mugiwara/ → [muggjara] /muQgjara/
[muŋgjara] /muŋgjara/
- 「菓屋」 [kusrirja] (*) /kusrirja/ → [kusrŋja] /kusuQrja/
[kusunrja] /kusuNrja/
- 「まるで」 [marūde] (*) /marude/ → [madde] /maQde/
[mande] /maNde/
- b. C₁が鼻音かつ語頭るとき, C₁の前に撥音かV₂の後に引き音が補われる。
- 「見える」 [mieru] (*) /mi.eru/ → [mmeru] /N.meru/ ([^mmeru] /Nmeru/)
[me:ru] /meRru/
- 「夫婦」 [mijoto] (*) /mijoto/ → [mmjoto] /N.mjoto/ ([^mmjoto] /Nmjoto/)
[mjo:to] /mjoRto/
- c. C₁が有声阻害音かつ語頭るとき, C₁の前に撥音かV₂の後に引き音が補われる。
- 「具合」 [ŋuai] (*) /gu.ai/ → [hŋai] /ŋgai/ (由良[hŋgæ:] /Ngea/)
- 「地黄煎」 [^ŋgio:sen] * /gi.oRsen/ → [gjo:sen] /gjoRsen/
- d. C₁が無声音かつ語頭るとき, C₁の前に促音かV₂の後に引き音が補われる。
- 「消える」 [kieru] (*) /ki.eru/ → [kkeru] /Qkeru/
[ke:ru] /keRru/
- 「据える」 [sueru] (*) /su.eru/ → [sseru] /Qseru/
[se:ru] /seRru/

以上の他に、「C₁がゼロかつ非語頭るとき」という条件が残るが、淡路方言では非語頭の場合撥音または促音が補われるため、この環境では音節融合が起こらないことが予想される。

(32, 33) のように、語彙的な音節融合では促音、撥音が補われるから、共時的には「ヨル」, 「ジャ」, 「ヅ」などと同様に融合3のレベルの融合と分析できる。

表 10. 語彙的な音節融合のプロセス

	牛屋	松脂	団扇	竹輪	闇夜	一膳	手伝い
基底形	[usi(-)ja]	[macu#jani]	[uciwa]	[ciku#wai]	[jami#jo]	[icizeN]	[tecudai]
融合3	us.jja	mac.wjani	uc.jwa	cik.wwa	jam.jjo	ic.jzeN	tec.wdai
調整規則	us.sjja	mac.cwjani	uc.cjwa	cik.kwwa	jam.mjjo	ic.zeN → ic.ceN	tec.dai → tet.tai
	(uQsjja)	(maQcwjani)	(uQcjwa)	(ciQkwwa)	(jaNmjjo)	(iQceN)	(teQtai)
w-j 同化	uQsja	maQcjani	uQcja	ciQkwa	jaNmjo	—	—
子音同化	uQfa	maQfjani	uQfja	fjiQkwa	—	—	—
w-j 削除	—	—	—	fjiQka	—	—	—
表層形	[uʃʃa]	[matʃʃani]	[utʃʃa]	[ʃʃikka]	[jammjo]	[ittʃeN]	[tettai]

モーラの保存と構造保持から、音節融合は次の3種類に分かれる。

(34)		「ヨル」型	「バ」・「ワ」型	「ガ」・「ハ」型
	モーラ保存	○	×	×
	構造保持	○	○	×

「御馳走」/goQco(R)/ のように、 C_1 と C_2 が coronal の融合では σ_3 が拗音になるかは σ_2 のみで決まるが、「面白い」/omoQsjo/ のように、 C_2 が /r/ の場合は C_2 がゼロの場合に準じる一方で C_2 が /r/ の融合は C_1 が coronal に限るなど、/r/ はゼロと coronal の中間的な振舞いを示す²⁷。

3. 音節融合の通時的考察

2節では、共時論的観点から、淡路方言の音節融合が3つのタイプに分けられることを確認した。本節では、音節融合を通時的観点から分析する。

「ガ」・「ハ」の融合では、「ヨル」型の融合とは異なり、「ガ」・「ハ」に相当する分のモーラが増えない。通時的には、(35)のように語末の長母音が短母音化したためと推定される。

- (35) 「滝が」/takiga/ > [takiã] > [takjã:] > [takja:] > [takja]/takja²⁸
 「滝は」/takiwa/ > [takija] > [takja:] > [takja]/takja/

(語末) 長母音の短母音化は淡路方言で広く観察される ([例] タイフ「台風」)。特に融合形では、「苦労が(多い)」[kura]~[kuro^wa]、「苦情が(多い)」[kuzã]~[kuzo^wa]など、語末が音韻的に短母音として扱われる場合がある。これらは「苦労」[kuro:] /kuroR/ ~ 「苦労が」[kura] /kura/, 「苦情」[kuzo:] /kuzjoR/ ~ 「苦情が」[kuzã] のように、融合形の方が却って短くなる。

これに対し、「ヨル」型の融合は(語頭を除き)長母音化ではなく促音・撥音挿入形で、脱落する母音も狭母音に限られるなど、条件が大きく異なる。そのため、「ガ」・「ハ」の融合と供給関係や奪取関係がなく、音韻規則による通時的な順序の推定が困難である。どちらの変化が古いかについて、「ガ」・「ハ」型の融合は [tja], [dja], [sja], [zja] などの二次的な拍が現れ、/N/ の融合形から語末の撥音が [n] > [N] と変化してから生じた²⁹と考えられるのに対して、「ヨル」型の融合は(36)のように地名にも見られ、古い変化であることを示唆している。

²⁷ 淡路方言での /r/ の中間的振舞いから、 C_2 がゼロの場合と coronal 同士の融合を1つにまとめたが、やはり両者は別扱いすべきだろう。通時的には、「怒られる」/okorareru/~/okoraeru/, 「~だろう」/~daro/~/~dar/ や 「~たら」/~tara/~/~tar/, 「~なら」/~nara/~/~nar/, 「~から」/~kara/~/~kar/, 「~ねばならぬ」/~na=naran/~/~Nnan/ などの /r/ 脱落が関係しそうだが、/akireru/「呆れる」、/cubureru/「潰れる」などの /r/ は脱落せず、/~ara-/ の /r/ 脱落も南部以外では稀だから、/~C[coronal]V[+high]F-/ の /r/ が脱落する条件変化があったことになる。それより、/~jã-/ > /~j-/ の同化と考えた方が適切か。共時的には、ad hoc だが融合3で /jr/ → /rj/ の音位転換を想定する。

²⁸ 小林(1998)の主張するように、「ガ」の融合形(および無助詞形)は鼻濁音の地域に隣接していて、「ŋa > a (融合形) > ø」(小林1998: 29)という段階を経た可能性が高いと思われる。

²⁹ 「因縁」, 「輪廻」などの連声形から、語末での音価は古く [n] だったと推定する。

- (36) a. 「東町」(岩屋の地名) [çiŋaʃʃo]/higaQsjo/ < /çiŋaʃiʃo:/ */higasicjo(R)/
 b. 「育波」(北淡の地名) [ikk^(w)a]/iQk(w)a/ < /ikuha/ */ikuha/
 c. 「松帆」(岩屋, 西淡の地名) [mattso]/maQco/ < /matsuho/ */macuho/
 d. 「賀集」³⁰(南淡の地名) [kaʃʃo]/kaQsjo/ < /kaʃi.^wo/ */kasi.o/

「バ」・「ワ」の融合形は、モーラが保存されない点で「ガ」・「ハ」型に似るが、[sja], [tja] などの拍を生じない点で相対的に古くみえる。ただし、「バ」・「ワ」の融合形は活用形とみなされて postlexical な音声・音韻が禁止された可能性がある。matehen 「待たない」は */maciwasenu/ に由来するのに *mac(i)ehen になっていないのも、活用形では cje, ce のような周縁的な拍が回避された結果と考えられる³¹。そうであれば、「バ」・「ワ」の融合も、「ガ」・「ハ」の融合とほぼ同時期に生じた可能性がある。その場合、両者の共時的な違いは二次的に生じたことになる。

4. 近隣方言に見られる音変化との関係

淡路方言の音節融合と類似の変化は通方言的に見られる。これらはそれぞれの方言で独立して並行的に生じたのか、それとも他方言からの伝播や、系統的な関係性はあるのだろうか。

4.1. 文法的な融合形の分布

「ガ」の融合形(aなどの弱化形を含む)は、GAJ第1図～第3図を参考にすると、東北の岩手県一帯と青森県南部地方、北陸一帯、近畿周辺部に見られ、無助詞形は融合形に囲まれるような形で東北、中部、近畿などに分布する。

これに対し、「ハ」の融合形は、GAJ第10図～第12図を参考にすると全国に広く分布する一方で、無助詞形は意外と分布が狭く、東北・北陸と近畿以外にはほぼ分布しない。

「バ」の融合形は、GAJ第128図～第131図を参考にすると、東北・鹿児島以外の地域に広く分布している。

「ヨル」の融合形は、GAJ第198図～第201図を参考にすると、滋賀・奈良・兵庫県南部・淡路・香川・徳島にチリヨル「散りヨル」型の形式(促音・撥音添加形)が分布し、但馬・鳥取・岡山・広島にチリヨール「散りヨル」型の形式(長母音化形)が分布する。融合形があっても地図に情報が無い地域もあると思われるが、比較的明瞭な地理的分布が認められる。

文法的な融合について、「ハ」と「バ」の融合形は全国的に見られ、並行的に生じた可能性が高い。「ガ」の融合も、東北、北陸、近畿周辺部という離れた地域に見られるので、やはり並行的に発達したものだろう。ただし、無助詞形を考慮すると、「ガ」の融合は近畿中心で生じたものが周辺に伝播した可能性が示唆される(次節でも述べる)。淡路内部での(16)と(17)の地

³⁰ 『和名類聚抄』(二十卷本天正本巻九3ウ)に「賀集_{加之乎}」とある。現在は普通 [kaʃu:] / kasjur/ と言う。淡路方言の音変化の傾向から、/kaQsjo/ になる直前の形は */kasi.o/ のように非狭母音の /o/ が想定される。

³¹ [se] はイツェン「一膳」など語彙的な融合にも見られるように禁止されているわけではないが、語頭以外では必ずその前に促音を伴うことから、促音のない [se] が避けられていると考えられる。/kake/ 「書け」: /mate/ 「待て」 = /kakehen/ 「書かない」: X (∴ X = /matehen/ 「待たない」) などの類推も働いているだろう。

域差から、南部の (16) が古形と推定され、北部で改新が生じやすい傾向を差し引いても、同変化が淡路北部から始まった可能性を示唆する。北部では（動作主性の低い非対格自動詞の主語で）無助詞化しつつある（中澤 2017）ことも、近畿方面からの地理的伝播を考えたい。

これに対し、「ヨル」の融合形には地域差が見られ、比較的最近生じた変化と思われる。淡路方言では「ヨル」型が古く「ガ」・「ハ」型が新しいと推定されるが、近隣方言の状況は必ずしもそうではないようだ。一方で、「ガ」・「ハ」型の融合は淡路方言にとって借用、伝播で最近生じた変化で、「ヨル」型の融合こそが淡路方言を特徴づける変化とも考えられる。

4.2. 語彙的な融合形の分布

最後に、淡路の近隣の方言における語彙的な融合形との関係について、『日本国語大辞典 第二版』の〈なまり〉をもとに若干の考察を行う。

語彙的な融合は「ヨル」型と同様だが、(30a) のように C_2 がゼロの場合と C_1, C_2 が coronal の場合に分かれるため、両者を分けたうえで融合形を検討する。

- (37) C_2 がゼロの場合 [勢い, 牛屋, 教える, 鯉, 付き合い, 月夜, 机, 年寄り, 日曜, 松脂]
- a. チッリヨル型…岩手・NHK (岩手)・仙台音韻・福島 2・石川・福井大飯 2・伊賀 3・京言葉・NHK (京都)・大阪・淡路 2・神戸・播磨 4・NHK (奈良)・紀州 2・和歌山県・大和 2・鳥取 3・島根・徳島 5・讃岐 3・伊予・伊予大三島 2・瀬戸内 2・島原方言・鹿児島方言
 - b. チリョール型…岩手・福島 2・茨城 2・栃木・埼玉・埼玉方言 3・千葉・八丈島・神奈川・山梨・信州上田・鳥取 2・島根・広島県・福岡
- (38) C_1, C_2 が coronal の場合 [一膳, 面白い, 蔓, 崩れる, 外れる, 珍しい, 縛れる, 忘れる]
- a. チッリヨル型…岩手 2・仙台音韻 2・仙台方言 2・山形・福島 2・茨城・福井・大阪・淡路 2・神戸・播磨 3・和歌山県・鳥取 3・島根・徳島 5・讃岐 5・愛媛周桑・伊予・伊予大三島・壱岐・壱岐続 2・鹿児島方言 2
 - b. チリョール型…なし

[] 内は検討に用いた語である。地点名の後ろの数字は融合が見られた項目数で、複数の形式があっても 1 つのみ計上した（例えば、福井では「面白い」にオモッサイ・オモッシャイ・オモッシャイが挙がっているが、チッリヨル型で 1 とカウントする）。1 つの項目でチッリヨル型とチリョール型の両方がある場合はそれぞれ 1 ずつ計上した。ただし、カッチョー「鯉」（八丈）のようにどちらともみなせる形式についてはカウントしなかった。

限られた項目に基づくものの、おおまかな傾向として、チッリヨル型は北陸・近畿・四国に分布する一方、チリョール型は関東・中部に分布する。東北と山陰には両形式が見られるが、

概ね相補分布を為している。(38b) の例は今回の調査範囲では該当例がなく, coronal の融合では長母音形が生じにくいと推定され, (37) と (38) は通方言的に区別する必要がある。

チリョール型は連母音の融合 ([例] アイ > エー) が盛んな地域に多い傾向があり, チリョール型は連母音の融合があまり見られない近畿・四国で発達したと考えられる。淡路では由良方言に連母音の融合が見られ (高橋 1982: 262), 他の地域でもギャル「蛙」, ヒシテ (ヒーテ, シテ)「一日《ヒトヒ》」のようにかつては連母音の融合があった痕跡が認められるから, 淡路にチリョール型の融合が生じたのは, 連母音の融合の回帰が生じたのと同時期と考えられる。近畿では分布の広さから「ガ」・「ハ」型の融合 > 「ヨル」型の融合の順に生じたかと推定されるのに対し, 淡路では「ヨル」型の融合 > 「ガ」・「ハ」型の融合の順に生じたと考える。もし, 融合形自体が伝播したとすれば, 淡路で逆転していることの説明が困難である。そのため, 近畿でまず「ガ」・「ハ」型の融合が生じ, 後に連母音の融合の回帰が近畿で起こり淡路に伝播したが, 「ヨル」型の融合は並行的に発達した。さらに時代が下って, 近畿の「ガ」・「ハ」型の融合が淡路に伝播した。変化である融合は, 連母音の回帰より伝播しづかったものとする。

淡路方言の「ガ」・「ハ」の融合が相対的に新しい可能性として, 対格「ヲ」との違いが挙げられる。先行研究が「連用修飾語を構成する「を」は省かれるのが常である」(脇 1965: 35), 「客語の助詞ヲはすべて省略される」(瀬田 1986: 78), 「淡路方言では「を」は皆省く」(興津 1990: 7) と一致して述べるように, 淡路方言では一般に対格はゼロ格 (無助詞) で現れ, 少なくとも主格より助詞の出る頻度が低い。主格より対格が無助詞になる傾向は通方言的に見られる (木部 2019) が, 対格が無助詞化した通時的な理由として, 次の変化が考えられる。

- (39) a. $-a=wo > [-a.u] > [-\text{ɔ:}] > [-a:] > /-a/$ b. $-i=wo > [-i.u] > [-ju:] > [-i:] > /-i/$
 c. $-u=wo > [-u.u] > [-u:] > /-u/$ d. $-e=wo > [-e.u] > [-jo:] > [-e:] > /-e/$
 e. $-o=wo > [-o.u] > [-o:] > /-o/$

「ヲ」が /u/ に弱化し, ウ音便 (cf. 3, 4) と同様の変化を経て最終的に無助詞化した。「ガ」・「ハ」が無助詞になる方言では, これと類似の変化が生じたかと考えるが, 母音が /a/ のためチリョール型でなければ長母音化しない ([例] $-Ci=wa > -Cja > /-CCja$)。中国地方では「ハ」も「ヲ」も融合形になり (cf. GAJ 第 6 図), 東北では「ガ」・「ハ」も「ヲ」も基本的に無助詞なのは, それぞれ同時代に変化が生じたためと推定する。近畿方言でも「ガ」・「ハ」に無助詞が目立つのは, この変化が古い時期に生じたことを示唆し, チリョール型からチリョール型への変化 (連母音の融合の回帰) があったことを物語る。これに対し, 「ガ」・「ハ」の融合が生じる前に伝播でチリョール型へ移行した淡路方言では, (39) の変化のみ生じ, (35) は遅れることになった。

なお, (37, 38) は筆者の調査データに基づき, 淡路で融合が見られる語例を検討したが, 播磨, 徳島, 讃岐に淡路と共通の融合形が多く見られ, 近隣方言との類似が再確認された³²。

³² 一方で, 播磨ではオモッロイ「面白い」, ハッレル「外れる」, クッレル「崩れる」など, 淡路その他と異なる形式もあり, 変化の条件が同じか検討する必要がある (播磨の上記の形式はチリョール型に含めなかった)。

5. まとめと課題

本稿では、淡路方言の音節融合について考察し、モーラ保存と構造保持の観点から共時的に3つのタイプに分けられること、通時的には「ヨル」型が古く「ガ」・「ハ」型（および「バ」・「ワ」型）が新しいと考えられること、「ガ」・「ハ」型の融合は近畿方言から伝播したと考えられること、「ガ」と同様に「ワ」の無助詞形も融合形を経た可能性があることを述べた。

本稿では、 $[-te\#or-] \rightarrow [-tor-]$ 「～ている」、 $[-te\#jar-] \rightarrow [-tar-]$ 「～てやる」などのモーラ非保持型や $/h/$ の位置づけ（喉音音素 $/l/$ の認定とも関わる）、 $*/=zja=wa/ > /=zjo/$ 「～だよ」、 $*/=ka=wa/ > /=koR/$ 「～か？」など $[-awa-] > [-o(R)-]$ の変化については扱えなかった（南淡の地名 *motaigo* < **motoshiraigawa*「元払川」では $/r/$ 脱落を含め全ての変化が生じている）。 $[-awa-] > [-o(R)-]$ は「ハ」の融合形での $[-a=wa/ > [-a(R)/]$ との関係とともに、「ワ」での $[-a.u/ > [-ɔ:/ > [-a:]$ という変化の是非など、開合の対立の時期とも関わっている。これらは別の機会に改めて論じたい。

本稿で用いた記号（※引用部分は除く）

[] : (簡略) 音声表記。	∅ : ゼロ (∅ の代用)。	# : 語境界 (複合語境界も)。
[/] : 推定音声表記。	→, ← : (共時的) 交替。	* : 再建形 (左上に付ける)。
// : 音韻表記 (表層形)。	~ : 音声や語形のゆれ。	× : 正しくない予測形 (同上)。
: 基底形。形態素にも。	- : 接辞境界。	⟨ ⟩ : 対応形。
>, < : (通時的) 変化。	= : 接語境界。	【 】 : 筆者による補足。

参考文献

- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42: 15-70.
- 興津憲作 (1990) 『淡路方言—その特徴・語法・アクセント・語彙』旧津名郡一宮町: 兵庫県立淡路文化会館.
- 金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』東京: 笠間書院.
- 木部暢子 (2019) 「対格標示形式の地域差—無助詞形をめぐる—」『東京外国語大学国際日本学研究報告』5: 20-32.
- 小林隆 (1998) 「文法から見た東日本方言の形成」『月刊言語』27(7): 26-33.
- 高橋頭志 (1982) 「淡路島の方言」飯豊毅一, 日野資純, 佐藤亮一 (編) 『講座方言学7 近畿地方の方言』: 253-276. 東京: 国書刊行会.
- 高山倫明 (2012) 『日本語音韻史の研究』東京: ひつじ書房.
- 中井幸比古 (1990) 「アクセント核の担い手について」崎山理・佐藤昭裕 (編) 『アジアの諸言語と一般言語学』: 546-564. 東京: 三省堂.
- 中澤光平 (2011) 「淡路島方言における『助詞「が」・「は」の融合形』とその音韻的解釈」『日本方言研究会第92回研究研究会研究原稿集』: 1-8.
- 中澤光平 (2012) 「淡路島方言における音節融合と代償延長」第7回(琵琶湖)音韻論フェスタ(発表資料).

- 中澤光平 (2013) 「淡路島方言の助動詞「じゃ」のアクセントと促音について」日本音声学会
第 328 回研究例会 (発表資料) .
- 中澤光平 (2014) 「地域差に基づく淡路方言の下位区分の試み」『東京大学言語学論集』35: 187–
216.
- 中澤光平 (2017) 「淡路方言の記述と系統」博士論文, 東京大学.
- 禰宜田龍昇 (1986) 『淡路方言の研究』神戸: 神戸新聞出版センター.
- 宮城新勇 (2003) 『石垣方言辞典』那覇: 沖縄タイムス社.
- 与那国方言辞典編集委員会 (編) (2021) 『どうなんむぬい辞典』八重山郡与那国町: 与那国町
教育委員会.
- 脇道夫 (1965) 「淡路方言—活用語と助詞に関して—」『洲高国漢 別冊特別号』洲本市: 兵庫
県立洲本高等学校国語班.

A Synchronic and Diachronic Analysis of Syllable Fusion in the Awaji Dialects

NAKAZAWA, Kohei

kohein@l.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Awaji dialects, morphophonology, fusion, sound change, relative chronology

Abstract

In this paper, we perform a synchronic and diachronic analysis of the syllable fusion of the Awaji dialects spoken on Awaji Island and Nushima in Hyogo Prefecture. Similar to the surrounding Kansai and Shikoku dialects, consonant gemination such as *tossjori* and *nommjoru* is widely observed in the Awaji dialects. Defining syllable fusion as the conversion of two syllables into one syllable, we analyze the phonological rules that lead to the surface structure, and from two criteria—whether the length of mora is preserved (mora preservation) and whether the surface structure does not generate new phones (structure preservation), we classify syllable fusion into three types synchronically: both mora and structure preserved type such as *kacco*, mora not preserved but structure preserved type such as *tacja*, neither mora nor structure preserved type such as *udja*. In addition, due to the difference in sound change conditions applied to each type, we assume the diachronical order of changes is: mora and structure preserved type > neither mora nor structure preserved type (~ not mora but structure preserved type). Finally, we consider a similar phenomenon found in neighboring dialects, that the relative chronology of change does not always match the Awaji dialects, that some syllable fusion seems to be parallel change, and that some zero morphemes go through syllable fusion.

(なかざわ・こうへい 東京大学)